

音楽的な見方・考え方を働かせる中学校音楽科の創作、器楽の授業づくり —音遊びやアーティキュレーションを工夫する活動を取り入れた実践を通して—

教科指導重点コース 造形・創造科学系
磯貝 周

I 主題設定の理由

1 音楽科の今日的な課題から

新型コロナウイルスによる制限も少しずつ緩和され、筆者がお世話になった実習校でも、歌唱やリコーダーの授業、グループでの話し合いなどができるようになってきた。それに伴い、コロナ収束後の音楽の授業づくりについて考えていく必要性を感じた。

コロナ感染症対策下における課題として菅(2021)は、「特に中学校教員から多く挙げられたのが、これまでの歌唱や器楽などの「再表現活動に偏りがちな音楽授業の見直し」の声であった」と述べている。コロナ収束後の音楽教育では、従来の音楽の授業に戻すのではなく、AIの発達などの未来を見据えた新たな授業づくり、題材構成を目指していく必要があると考える。また、中島・高倉・平野(2016)は日本の音楽教育の問題点の一つは、「音楽づくり」や「鑑賞」が充分に行われていないことであると述べている。教科書に掲載されている教材数の差が原因の一つではないかと考え、教科書の目次を見てみると、教育芸術社の「中学生の音楽1」では、歌唱教材が9つ、鑑賞教材が7つなのに対し、創作教材は2つである。また、「中学校音楽2・3上」では、歌唱教材が10、鑑賞教材が6つに対し、創作教材は2つである。「中学生の音楽2・3下」でも、歌唱教材は8つ、鑑賞教材が6つに対し、創作教材は2つである。合計すると、歌唱教材が27、鑑賞教材が19、創作教材が6である。再表現活動に偏らないためには、創作など自分で新しいものを生み出す活動を充実させていくことが必要なのではないかと考えた。

2 中学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編から

中学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編(2018)によれば、中学校音楽科の目標は、「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して学習が行われることを前提とし、音楽的な見方・考え方を働かせた学習活動によって生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かにかかわる資質能力を育成することを目指すこと」である。このことから、音楽的な見方・考え方を働かせる授業づくりは、音楽科において重要な課題であると考えられる。音楽的な見方・考え方とは、「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること」とされ

ている。

また、中学校音楽科の改定の基本的な考え方として、以下の二つが示されている。

・感性を働かせ、他者と協働しながら、音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさや美しさなどを見出したりすることができるよう、内容の改善を図る。
・音や音楽と自分との関わりを築いていけるよう、生活や社会の中の音や音楽の働き、音楽文化について理解を深める学習の充実を図る。

以上のことから、これからの音楽の授業について考えていく中で、音楽的な見方・考え方を働かせた学習活動を通して、子どもの資質能力を育成できるように内容の改善を図っていく必要があると考える。特に、音楽的な見方・考え方を働かせるうえで重要なのは、知覚したことと感受したことを関連させ、音楽表現に活かしていくことであると考えられる。

II 研究の構想

1 研究の目標

生徒自身が知覚したことと感受したことを関連させ、音楽表現に生かしていくことができるようになることを目指し、「音遊び」や「アーティキュレーションを工夫する」といった活動を取り入れて、音楽的な見方・考え方を働かせられる授業実践になるようにする。また、創作に対し難しいというイメージをもつ生徒が多い実態や、自分の思いや意図に自信をもていない実態を改善する。さらに、現代音楽の世界にも触れさせることで、生徒の音楽的な視野を広げられるようにする。

2 以上の3点を研究の目標とした研究の仮説と手立て

(1) 研究の仮説

音楽をつくる当事者意識を育てることで、主体的に学習に取り組めるようになり、音楽的な見方・考え方を働かせて自分なりの思いや意図をもって音楽表現できるようになるのではないかと。

(2) 手立て

手立て1：導入で音遊びを取り入れたり、身近な素材である「紙」を活用して創作の学習を行ったりすることで、創作に対する難しいというイメージを減らすことができるのではないかと。

手立て2：音遊びから創作へと展開していくことで、知覚・感受したものと自己のイメージを関連付け、主体的に音楽表現を工夫する力を育てられるのではないか。

手立て3：楽譜通りに演奏するだけでなく、アーティキュレーションを自分たちで考え工夫することによって、アーティキュレーションがもたらす曲想の変化を捉え、思いや意図をもって主体的に音楽表現を工夫する心情を育てることができるのではないか。

3 仮説の検証方法

(1) アンケートの分析

アンケートによる実態調査を行い、どのような変容があったのかを分析する。

(2) ワークシートの分析

ワークシートの記述から、知覚したものと感受したことを関連させながら、思いや意図を音楽表現につなげられていたかを分析する。

Ⅲ 音遊びを取り入れた実践（教師力向上実習Ⅱ）

1 生徒の実態

配属された学級である中学校1年生29人を対象としたアンケート調査では、「音楽をよく聴きますか」という質問に対し、肯定的な回答の生徒は約8割であった。それに対し、「音楽の授業は好きですか」という質問に対しての肯定的な回答の生徒は6割に満たなかった。日常生活の中で音楽を聴くことがあっても、音楽の授業となるとやや好感を持つ生徒が減ってしまうことがわかった。また、「音楽をつくることは難しいと思いますか」という質問に対しては、9割近くの生徒が難しいという印象をもっていた。少しでも創作のハードルを低くできるように、生徒が親しみやすい教材を用いた創作の授業づくりを行う必要があると考える。さらに、「自分なりに工夫して音楽を表現しようとしていますか」という質問では、19人の生徒が肯定的な回答をしていたが、そのうち約7割は「どちらかといえばそう思う」という回答だったため、より思いや意図をもって音楽を表現しようとする力を育成する必要があると考える。そして、授業を観察する中で、自分がこうしたいというよりは、教師に言われたからそのように表現していると感じられる生徒もいた。以上のことを受けて、創作に対して難しいというイメージをもっていることや、自分の思いや意図を音楽表現に生かしきれていない実態を改善したいと考えた。

2 目指す子ども像

生徒の実態を踏まえ、本題材で目指す子どもの姿を次のように設定した。

他者と協働しながら、主体的に表現を工夫できる生徒

3 手立て

・「4分33秒」の鑑賞による音楽的視野の拡大

紙による創作を行う前段階として、教師の実演によるジョン・ケージ作曲の「4分33秒」を鑑賞させて、明確なメロディーが無くとも音楽になることに気づかせる。現代音楽に触れ、音楽的な視野を広げる。

・音遊びを取り入れた導入

音遊びとして、身近な素材である紙からどんな音が出せるか音探しを行うことで、様々な音の出し方や音色があることに気づくことができるようにする。

・紙を楽器として扱う

演奏が非常に平易であり、演奏に対し苦手意識のある子ども取り組みやすいと考え、本実践では紙を楽器として扱った。

・図形楽譜の活用

記録媒体として、図形楽譜を活用する。図形楽譜を活用することにより、五線譜に音符を書く必要がなくなり、音楽の授業が苦手な生徒も取り組みやすいと考えた。

4 授業実践の実際

対象：A 中学校 第1学年

分野：創作

題材：紙で音楽をつくろう

教材：ジョン・ケージ作曲「4分33秒」、新聞紙、

「【楽器を使わない音楽】紙をやぶくだけ【今できる打楽器アンサンブル】」（YouTubeの動画）

<https://www.youtube.com/watch?v=PtjO3BUIKiU>

(1) 実践内容

本実践は、15分の帯時間を利用して行った。題材全体は、2時間完了（15分×6）として計画を立て、実践した。【資料1】は、教師力向上実習Ⅱでの指導計画である。

第1時：導入としてジョン・ケージの「4分33秒」の鑑賞を行う。生徒達には目を閉じてもらい、聴くことに集中できるようにする。演奏を聴いた後、どんな音が聴こえたか発問したところ、「カタンカタン」という音（教師がピアノの蓋を開け閉めした時の音だと思われる）」という答えや、「車が通る音」、「時計がカチコチしている音」といった答えが返ってきた。そこで、ジョン・ケージや「4分33秒」という楽曲について触れ、身の回りの音や沈黙も音楽になるという視点をもたせた。次に、新聞紙を配り、音遊びとして「紙からどんな音色が出せるか試してみよう」という活動を行う。ワークシートに音の出し方とどんな音色がしたかをメモするよう指示をした。生徒達は、それ

資料 1

月	授業で扱う教材	15分活動	ねらい	関連する音楽の要素
4	・校歌 ・「We'll find the way」			
5	・主は冷たい土の中に ・喜びの歌（リコーダー）	① ガイダンス （アンケート調査と説明） ② 4分33秒、紙を使った音遊び（紙で音楽をつくらう1）	・子ども達の音楽の概念を広げる。 ・身近なもの（紙）を楽器として扱い、創作をより身近に感じられるようにする。 ・様々な音色に気づく耳を育てる。	・音色 ・リズム
6	・「浜辺の歌」 （合唱コンクールの選曲）	③ 紙で音楽をつくらう2 ④ 紙で音楽をつくらう3 ⑤ 紙で音楽をつくらう4 ⑥ 紙で音楽をつくらう5	・音楽を形づくっている要素とその働きについて、作り手としての視点をもって学ぶことができるようにする。 ・音を音楽へと構成していく過程で、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、捉えたことと自己のイメージや感情を関連付けて考える力を養う。	・音色 ・リズム ・強弱 ・構成
7	・合唱コンクールの曲 （音作りと曲作り） ・魔王	⑦ 紙で音楽をつくらう6		

ぞれ個人で試行錯誤しながら音探しをする。その後、まずはペアでどんな音を見つけたのか共有し、全体でも意見交流を行う。その際、人の意見は赤ペンで書き加えるように指示をした。

第2時：本題材の目標である、学習課題「音色と構成を生かして音楽をつくらう」YouTubeの動画「【楽器を使わない音楽】紙をやぶくだけ【今できる打楽器アンサンブル】」を鑑賞し、動画の中で自分がいいなと思った音の出し方をワークシートに赤ペンで加筆する。今まで見つけてきた音に対し、音に合ったマークを考えた。マークを考えることが難しいと感じる生徒に対しては、○や△などシンプルなマークを付け、図形楽譜にする際、どの音を使うのかわかるように指導・援助を行った。

第3時：童謡「チューリップ」を用いて、反復、変化、対照といった構成に関する説明を行った。反復している部分だと感じたらグー、変化させている部分だと感じたらチョキ、対照させていると感じたらパーといったように、ハンドサインを使って自分の考えを示せるようにした。その後、図形楽譜についての説明を行い、自分でテーマを設定した。設定したテーマに合うよう音色や構成を工夫しながら、個人で音楽創作を行った。机間指導する中で、その音でどんなことを表現したいのか、思いや意図を確認するようにした。

第4時：ペアでお互いの作品に対しアドバイスをし合う対話的な学習の場を設定した。ペアトークをしながら、創作を進めた。

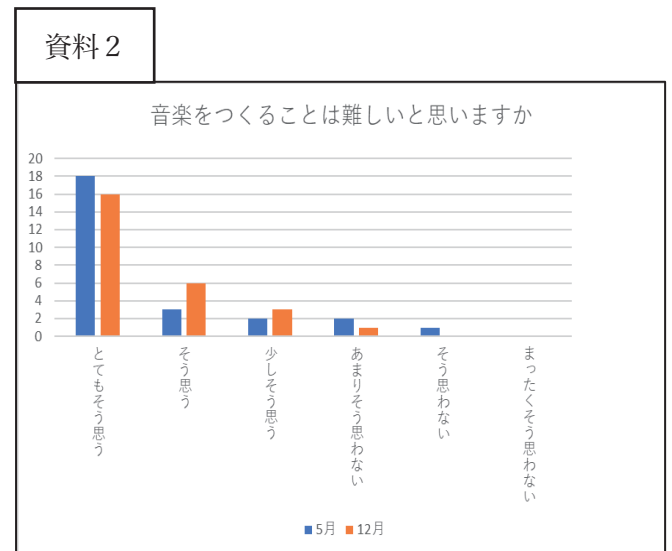
第5時：ペアトークで得た学びを踏まえ、個人で作品を完成させる時間となった。完成した生徒から、次回の録音に向けて練習を行った。

第6時：完成した紙の音楽をペアで録画し合い、提出した。提出の際には、SKYMENU Cloudの「発表ノート」に動画を張り付けて提出させた。

(2) 結果と考察

①アンケート調査から

【資料2】は、事後アンケートの結果である。この結果から、生徒達にとって音楽をつくることはまだまだ難しいイメージがあることがわかった。事前アンケートを行った5月の頃と比べると、若干ではあるが「音楽をつくることは難しいと思いますか」という質問に対し、「とてもそう思う」という回答は減少している。しかし「そう思う」か「そう思わないか」で比較すると、難しいというイメージをもつ生徒はむしろ増えており、反省すべき課題となった。原因として、今回の実践で行った創作は自由度が高く、1年生の最初に行う創作としては難易度が高かったことが考えられる。小学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編（2018）の第4章指導計画の作成と内容の取扱い（6）アにおいて、「適切な条件を設定するなど、児童が無理なく音を選択したり組み合わせたりすることができるよう指導を工夫すること」と言及されている。中学生においても、適切な条件設定が必要であったと考える。また、テーマを統一することや、グループワークを多く取り入れるなどの工夫も必要であったと考えられる。



②ワークシートから

【資料3】のワークシートは、第1時から第2時において扱った音探しのワークシートである。この生徒Aは、自分で見つけた音、友達から教えてもらった音、YouTubeの動画を鑑賞して見つけた音をそれぞれ分けて書いている。特に自分で見つけた音色からは、「楽しいような」、「タンバリンやマラカスのような」といったような明るい雰囲気を感じている。また、音に対する自分なりのイメージをマークとして表すことができている。

紙を使って音楽をつくろう!① 資料3 生徒A

音遊び① 紙からどんな音色が出せるか試してみよう

音の出し方	どんな音色がしたか
・ ちらちらさせる ~~~	・ 鳥がとんでいる
・ 紙でデコボコする (○)	・ 楽しい音
・ たたく (○)	・ タンバリンやマラカスの音
・ デコボコ (○)	・ ジャズの音
・ ひらける ---	・ 驚く
・ 紙を揉む (○)	・ 楽しい感じ
・ 大きいのを破る (○)	・ 喜んでいる感じ

【資料4】は、第3時から第6時にかけて扱った生徒Aの図形楽譜のワークシートである。前時までに見つけた音を組み合わせ、図形楽譜として表した。生徒Aは「楽しい感じ」をテーマとし、特に工夫したこととして、楽しい感じになるように、明るい感じの音を組み合わせたと記述している。また、作品の中では友達から得た学びも取り入れている。演奏した音源を聴くと、音色だけでなく、リズムによっても構成が工夫されており、知覚・感受したことを自己のイメージと関連させながら音楽で表現することができていたと考えられる。

紙を使って音楽をつくろう!② 資料4 生徒A

音色や構成を工夫して紙で音楽

テーマ「楽しい感じ」

特に工夫したこと (音色、構成、強弱など)

楽しい感じに合うように、明るい感じの音を組み合わせたりしてみました。

【資料5】のワークシートは、生徒Bによる音探しのワークシートである。生徒Aとは違い、音色か

ら「風の音」、「雨の音」など、自然の音を連想したことがうかがえる。指で紙を弾いたことによって生じた音に対し、生徒Aは楽しいという感じを受けているが、生徒Bは雨の音のように感じている。このように、同じ音の出し方をしても人によって感じ方が違うということが音楽科ではしばしばみられるが、どちらの音の受け止め方も間違いではないと考える。むしろこうした感じ方の違いについて学級に広げていくことで、主体的に表現を工夫する姿につながっていくのではないかと考える。

紙を使って音楽をつくろう!① 資料5 生徒B

音遊び① 紙からどんな音色が出せるか試してみよう

音の出し方	どんな音色がしたか
・ 紙を揉む	・ 風の音
・ 指で叩く	・ 雨の音
・ 紙をふる	・ 楽しい音
・ 紙をひらける	・ おいしくて楽しい音
・ 紙を揉む	・ 雨の音

【資料6】は生徒Bによる図形楽譜のワークシートである。生徒Bは「雨の日の感じ」をテーマとし、特に工夫したこととして雨が強くなっていく感じを、強弱を使って工夫したと記述している。演奏した音源を聴くと、雨の日を表現するために自分自身が雨の音だと感じた音から始まり、雷や風なども音色を生かして表現しようとしていることがうかがえる。音探しを行ってからテーマを決めて創作の活動に取り組んだことにより、音色を聴きとり、音色の働きが生み出すよさや面白さ、美しさを生かした表現につながったのではないかと考える。

紙を使って音楽をつくろう!② 資料6 生徒B

音色や構成を工夫して紙で音楽

テーマ「雨の日の感じ」

特に工夫したこと (音色、構成、強弱など)

雨が強く感じる感じと、強弱を工夫して工夫しました。

③振り返りの記述から

振り返りに書かれた記述を分析してみると、「丸め

たり叩いたりすると音が変わった」というような音の変化に関すること、「紙から色々な音が出せた」というような音の多様性に関することといった、音色に関する記述をしている生徒が29人中15人であった。さらに、「いろいろな音色が出せて面白かった、楽しかった」というような記述は29人中12人の生徒がしており、約半数の生徒は、難しいイメージのある創作でも楽しみながら活動できていたと考えられる。

(3) 成果と課題

①成果

紙（新聞紙）を活用した創作は、かなり平易な技術で音色の探求を行うことができた。

自分で考えたテーマを音楽で表現するために、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、捉えたことと自己のイメージや感情と関連付けられる活動にもなっていた。

音遊びを取り入れることによって楽しみながら創作を行うことができた。

②課題

まず、使い終わった紙（新聞紙）がごみになってしまうため、生徒によってはその後の歌の時間などに手で遊んでしまうといった姿が見られた。紙を回収し、床にも紙が落ちていない状態にするということを徹底していく必要があった。

音遊びや演奏が平易なものを取り入れても、すぐには生徒の創作への難しさは払拭されない。「自分にも音楽をつくることができるんだ」と思えるような手立てや活動を考えていきたい。

適切な条件設定が必要であった。今回の実践では、一人一人テーマがバラバラで自由度が高かった。様々なイメージが連想できるテーマで統一し、グループワークがより効果的になるよう工夫する必要があったと考える。

また、録音する際のタブレットの操作説明なども、順序だててわかりやすくしないと混乱が起きてしまう。生徒にわかりやすく説明できるよう、話し方にも気をつけるようにしたい。

IV アーティキュレーションを工夫する活動を取り入れた実践（教師力向上実習Ⅰ）

1 生徒の実態

実習校の生徒は、音楽の授業に進んで参加できる生徒が多く、創作や器楽などの活動には楽しんで参加する様子が見られる。コロナウイルスの影響で歌唱や器楽の活動、話し合い活動はあまりできていない。

2年生（当時）においては、1年生の頃に「栄光の架橋」を練習していたため、リコーダーの演奏技能自体は低くないと思われるが、「リコーダーを演奏することが好きだ」と答えた生徒は、「好きではない」と答えた生徒の数とあまり変わらないことがアンケート

調査からわかった。

【資料7】は事前アンケートの結果である。音楽の授業で仲間と協力したり話し合ったりしたいと思う生徒が9割で、協働的な学びを生徒たち自身が求めていると考えることができる。なお、リコーダーを演奏する時に気を付けていることに関して「息の強さ」や「音色」、「テンポ」や「タンギング」、「運指」の項目は大体同じくらいの生徒が回答しているが、「アーティキュレーション」と答えた生徒が非常に少なかった。これは今まで学習してきたリコーダーの曲にほとんどにアーティキュレーションが書かれておらず、意識する必要性を感じていなかったためだと思われる。

資料7



2 目指す子ども像

生徒の実態を踏まえ、本題材で目指す子ども像を次のように設定した。

協働的な学習を通して、様々な価値観を受け入れて自らの学びに活かすことのできる生徒

3 手立て

・アーティキュレーションを工夫する活動

曲を演奏できるようにして終わりではなく、アーティキュレーションを自ら工夫する活動を行うことで、作り手の立場を体験し、主体的に表現を工夫できるようになると考えた。

・SKYMENU Cloudの画面比較機能の活用

「画面比較」機能を活用することで、異なる意見をもつ生徒同士で対比することができ、さらに思考を深められるのではないかと考えた。

・SKYMENU Cloudの発表ノート機能の活用

発表ノート機能を活用してタブレット上で楽譜を配布し、書き込めるようにする。そうすることで、SKYMENU Cloudの画面比較機能を活用して表現を比較したり、グループワーク機能を活用して瞬時に他の人の楽譜を参考にできるようにしたりできるようになると考えた。

・実際に自分で表現したいことを楽譜に書き込む。

ただアーティキュレーションに関する説明を聞くだけではなく、実際に自分で楽譜に書き込むことで作り手としての体験ができ、アーティキュレーションに気を付けて演奏するようになるのではないかと考えた。

4 授業実践の実際

対象：A 中学校 第2学年
 分野：器楽
 題材：曲想を感じ取って、表現の仕方を工夫しよう
 教材：「聖者の行進」

(1) 実践内容の概要

タブレットで配布された楽譜にアーティキュレーションを書き込みながら、自分なりの思いや意図をもつ。

2、3人の抽出した生徒が、表現の工夫を書き込んだ楽譜をテレビ画面に提示しながら実際にリコーダーを演奏する。

タブレット端末で気づいたことや感じたことをまとめ、テレビ画面に映して共有する。

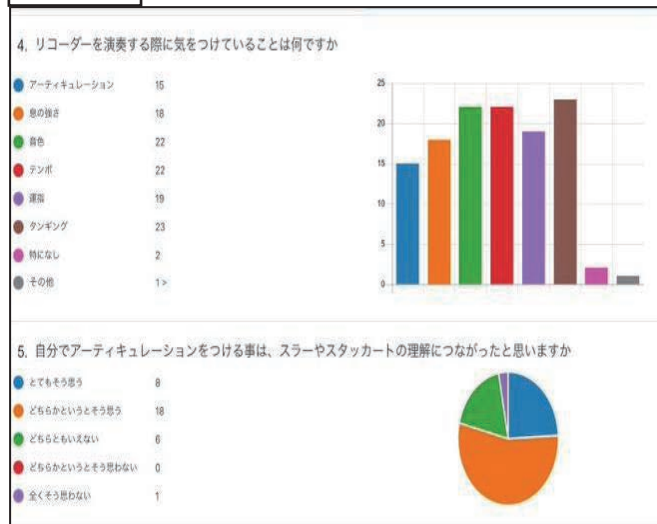
なお本実践は、SKYMENU Cloudのホームページで紹介されていた三笠による「コロナ禍におけるリコーダー指導の実際」という実践を参考に、教材や内容を筆者が工夫したものである。

(2) 結果と考察

①アンケート調査から

【資料8】は、事後アンケートの結果である。事前アンケートの時よりもアーティキュレーションに気を付けて演奏する生徒が増え、自分でアーティキュレ

資料8

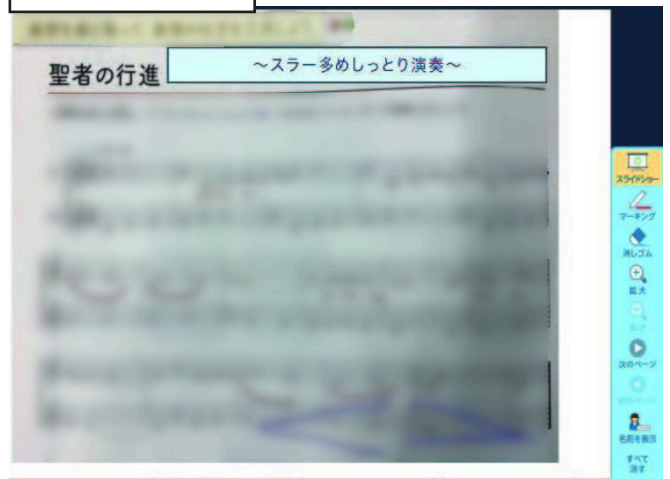


ーションをつけることは、スラーやスタッカートの理解につながったという生徒が半数以上であった。このことから、自分でアーティキュレーションをつけ、表現を工夫する活動を行ったことで、楽譜に書かれたアーティキュレーションも意識できるようになったのではないかと考える。しかし、単にアーティキュレーションの付いている曲を練習することでも同様の効果が得られる可能性があるため、実践による比較が必要であると考える。

②生徒のワークシートの記述から

【資料9】は、「聖者の行進」のアーティキュレーションを付ける活動で扱ったタブレット上で配布した生徒Cのワークシートである。配布の際には、SKYMENU Cloudの「発表ノート」機能を活用した。タブレット上のワークシートにアーティキュレーションを書き込み、テレビに映すことで全体への共有を図った。この生徒Cは1回目のド、ミ、ファ、ソの音型にテヌートを付け、2回目のド、ミ、ファ、ソの音型ではスタッカートをつけることで雰囲気を変えている。また、しっとりとした感じの演奏にしたいという思いをもち、スラーを多めにつけてレガート奏法中心で演奏しようとしている。このことから、スラー（レガート奏法）のもたらす雰囲気と自己のイメージとを関わらせながら表現を工夫しようとしており、音楽的な見方・考え方を働かせた学習になっていると考えられる。

資料9 生徒C



③振り返りへの記述から

【資料10】は、意見交流後の生徒Dと生徒Eによる振り返りの記述である。他者の考えを、自分の工夫に活かそうとしていることが読み取ることができる。こういったことの積み重ねが、主体的な表現の工夫につながると考えられる。また、実際に楽譜を見せながら演奏することは、生徒の思考を刺激することにつながったと考えられる。

資料 10 上：生徒 D 下：生徒 E

今日の振り返りをしましょう
(他の人の考えを知ったり、演奏を聴いたりして、気づいたことや自分はこうしたいといったことなど、感想を書いてみましょう)

レガート奏法を続けるとメリハリがつかないので、演奏の仕方が真逆のスタッカートなどを入れると良くなると思いました

今日の振り返りをしましょう
(他の人の考えを知ったり、演奏を聴いたりして、気づいたことや自分はこうしたいといったことなど、感想を書いてみましょう)

自分では、同じ音程のところを違うリズムで演奏するなんて考えは無かった。
凄いとと思ったけど、自分は同じリズムでやって、統一生を出したいと思いました。

(3) 成果と課題

①成果

アーティキュレーションを工夫する活動を取り入れたことで、リコーダーを演奏する際にアーティキュレーションに気を付けて演奏する生徒が増えた。また、再表現活動で終わらず、思いや意図をもって音楽表現を工夫しようとする姿がみられた。

SKYMENU Cloud の機能を活用することで、コロナ禍であってもお互いの考えや意見の交流ができた。

②課題

自分なりの表現を考えるということに戸惑いを見せる生徒が多く、鑑賞などの活動を取り入れながらアーティキュレーションによって生み出される特質や雰囲気を感じることが必要であったと考える。また、自分の表現したいことを演奏で表現することが難しく、楽譜通りにアーティキュレーションを吹き分けられていない生徒も見られた。授業の初めに、常時活動として吹き方を確認したり、演奏を録画し、教師がフィードバックしたりしていく必要があったと考えられる。

V アーティキュレーションを工夫する活動を取り入れた実践(教師力向上実習Ⅲ)

1 生徒の実態

実習校の1年生は、アルトリコーダーについては、組み立て方・片づけ方・基本的な運指(ド～1オクターブ上のド)を学習し、「主は冷たい土の中に」

や「虹の彼方に」といった楽曲を演奏してきた。しかし、自分でアーティキュレーションを付け、創意工夫するといった経験はあまり無いため、思いや意図をもって主体的に表現しようとするには課題が残る。また、グループで協働して活動する経験もまだ少ないため、協働して音楽表現を創意工夫する場面も必要である。そこで、実際に既存の曲を自分なりに解釈し、グループでアーティキュレーションを考える活動を行うことで、思いや意図をもって主体的に音楽表現を創意工夫できるようにしたい。また、リコーダーを演奏する時に気を付けていることについて中学校1年生1学級28人にアンケート調査を行ったところ、やはりアーティキュレーションに気を付けてい吹いている生徒は1割ほどしかいなかった。こうした実態を改善していきたい。

2 目指す生徒像

生徒の実態を踏まえ、本題材で目指す子ども像を次のように設定した。

思いや意図をもって主体的に音楽表現を工夫する生徒

3 手立て

・スタッカート奏法中心の演奏とレガート奏法中心の演奏の比較聴取

教師力向上実習Ⅰでの実践の反省として、スタッカート奏法で演奏した時にどのように感じるか、レガート奏法で演奏した時にどのように感じるかといった知覚・感受したことを交流する場がなかったことが挙げられる。そのため今回の実践ではスタッカート奏法中心の演奏とレガート奏法中心の演奏の比較聴取を行うことにより、生徒がイメージを膨らませやすくなると考えた。

・楽譜上の音符や歌詞に注目させ、自分のイメージと関わらせて考えることができるようにする。

旋律の流れや歌詞に注目させることで、知覚・感受したことと自己のイメージを関連させて表現を工夫できるのではないかと考えた。

・楽譜の移調

本実践で扱う文部省唱歌「つき」を、原調の「へ長調」から完全4度下げた「ハ長調」に移調し、無理のない音高で既習の運指のみで吹けるようにした。

・アーティキュレーションを工夫する活動

曲を演奏できるようにして終わりではなく、アーティキュレーションを自ら工夫する活動を行うことで、主体的に表現を工夫できるようになると考えた。

4 授業実践の実際

対象：A 中学校 第1学年
 分野：器楽
 題材：表現を工夫しよう
 教材：文部省唱歌「つき」

(1) 実践内容

まず、リコーダーのスタッカート奏法とレガート奏法について、記号の意味や演奏方法を学習した。その後、SKYMENU Cloudの「発表ノート」に張り付けた、教師による文部省唱歌「つき」（スタッカート奏法中心の演奏とレガート奏法中心の演奏）の演奏をそれぞれ比較聴取し、アーティキュレーションの違いによる曲想の変化を感じ取る活動を行った。

ウォーミングアップとしてタンギング練習を行った後、「つき」を個人で練習した。

2段目を取り出し練習した後、2段目だけリレー奏を行った。その後、全員で曲を通して演奏した。

グループに分かれ、楽譜にアーティキュレーションを書き込みながら、表現を工夫する。想定よりも練習に時間が必要だったため、ポイントを絞り、曲の一部にアーティキュレーションを付ける活動に変更した。アーティキュレーションをどのような表現を目指して付けたのかという部分で思いや意図を言語化するのが難しい生徒には、スタッカートを使うとどんな感じがしたか、スラーを付けるとどうなるかといったことを実際に演奏しながら試行錯誤するよう促した。

中間発表を行い、どんなアーティキュレーションを付けたか、なぜそのようにしたのかを発表した。

(2) 結果と考察

①アンケート調査から

【資料11】は、事後アンケートの結果である。実践前と比べてアーティキュレーションの項目に大きな変容は見られなかった。これは、筆者の生徒の実態把握が甘く、アーティキュレーションを工夫する活動の時間を十分とることができなかつたためだと思われる。

る。限られた指導計画の中で、どのような学習活動に焦点を当てるのかを吟味して実践をするべきであった。

タンギングや息の強さに気を付けている生徒も減少している。中学校1年生で運指を十分習得していない段階で、意識することが増えてしまったからだと考えられる。スタッカート奏法やレガート奏法は、タンギングを習得していることが前提の奏法であるため、1年生でアーティキュレーションを工夫する活動を行う前段階として、タンギングがちゃんとできるのか実態を正確に把握しておく必要がある。扱う教材についても、「聖者の行進」のように片手で演奏でき、アーティキュレーションの工夫に集中できる教材を選択すべきであった。

今回のアンケートの結果をしっかりと受け止め、反省し、これからの教育活動に生かしていく必要がある。

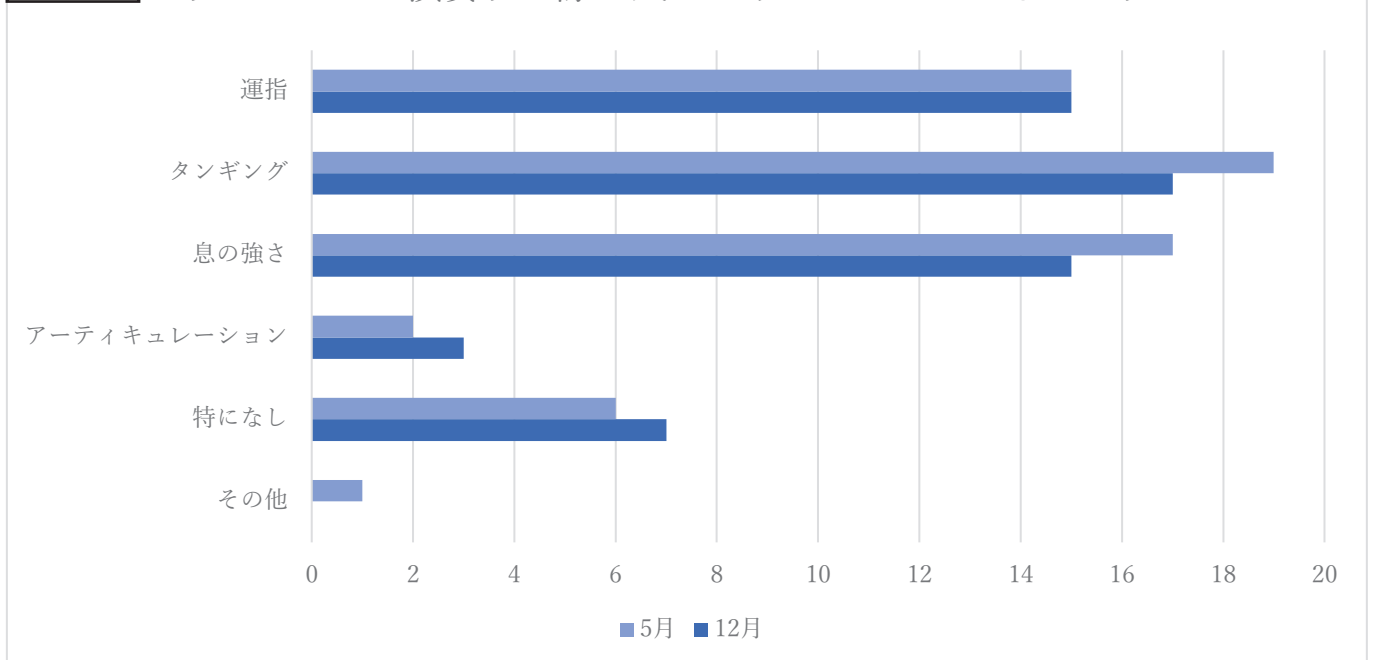
②ワークシートへの記述から

【資料12】は「つき」のアーティキュレーションを工夫する活動を行う際に扱ったX班のワークシートの一部である。本実践では班で話し合いながらアーティキュレーションを工夫し、決定したアーティキュレーションをワークシートに記入した。また、なぜスタッカート奏法を用いるのか、なぜレガート奏法を用いるのか、その思いや意図を確認しながら机間指導を行った。

X班は、1小節目と2小節目ではスラーを用いているが、3小節目と4小節目ではスタッカートを用いている。また、5小節目から7小節目の1拍目まではスラーを用いているが、最後の「まるい」の歌詞の部分

資料11

リコーダーを演奏する際に気を付けていることはなんですか



はスタッカートを用いている。X班は、本来音を短く切って演奏するスタッカート奏法を使うことで、レガート奏法で演奏する部分と対比させ、強調させようとしていると考えられる。また、5小節目と6小節目を滑らかに演奏するためにスラーを付けてレガート奏法で演奏しようとしていることが読み取れる。しかし、1小節目から2小節目の明るい感じを、レガート奏法でどのように表現するのかという部分に関しては生徒の思いや意図をしっかりと確認すべきところだったと反省している。

また、ワークシートそのものについても、五線譜の上にどんなことを表現したいのか記入する欄をつけたが、生徒にとって見にくくなってしまった。X班のワークシートからは、スタッカート奏法中心の演奏と、レガート奏法中心の演奏による比較聴取の効果は実感できなかった。

資料12 X班

「つき」

文部省編

(明るい 残詔)

(なみらか なみらか はっきり)

【資料13】はY班のワークシートである。Y班は、1段目で月が出たのがうれしく、飛び跳ねている感じを表現しようと、1小節目と2小節目にスタッカートを付け、3小節目と4小節目にはスラーを付けている。1小節目と2小節目の歌詞は「でたでた」となっており、そこにスタッカートを付けることで月が出たうれしさや飛び跳ねている感じを表現しようとしていると考えられる。2段目の思いや意図を記入する欄には、「まーるいだから、まーのところがスラーにし、優しい雰囲気を出した」と記述されている。歌詞に注目し、言葉に合わせた表現をしようとしていると考えられる。また、スラーによって生み出される特質を生かし、優しい雰囲気を表現しようとしている。このことから、歌詞に注目させることで、歌詞から表現したいイメージを膨らませることができたと考えられる。

資料13 Y班

「つき」

文部省編

(月が出たのがうれしく、飛び跳ねている感じ)

(まーるいだから、まーのところがスラーにし、優しい雰囲気を出した)

(3) 成果と課題

①成果

歌詞に注目させることで、どのように表現を工夫するかイメージを膨らませることがつなげることができた。これまでアーティキュレーションを工夫するといった、楽譜に書かれていないことを表現する経験が少なかったため、最初は自分の意見をなかなかもてなかった生徒も、最終的には自分の意見をもつことができた。

②課題

生徒の実態に合った教材の選択が必要であった。ハ長調に移調したことで、新しく習う運指はなかったが、2段目のリズムが難しいこと、ソからラへいくときの運指の難しさをもっと考慮しなければならなかった。

リコーダーでアーティキュレーションを工夫する活動を行うためには、それまでにスモールステップでタンギングや運指をしっかりと習得しておくことが必要であると感じた。

今回の実践では、個人で考える時間も少なく、班での話し合いもあまり深めることができなかった。

全体的に、生徒理解が足りておらず、時間配分が適切でなかった。そのため、当初予定していた活動を行うことができなかった。リコーダーが苦手な生徒をしっかりと把握し、机間指導時にはすぐに駆け付け指導するといったことが必要であった。また、説明や指示にもっと具体性が必要であった。ワークシートのどこに書くのかを分かっていない生徒もいたため、より丁寧な説明が必要であったと感じる。

VI まとめ

1 教師力向上実習を通して得た成果

本研究では、音遊びやアーティキュレーションを

工夫する活動を取り入れることによって再表現活動に偏らない、音楽的な見方・考え方を働かせる授業になると考え授業実践を行ってきた。

音遊びを行ったことで、難しいと思っている創作の活動も、音を聴いて感じたことと、自己のイメージを関連させながら行うことができた。また、紙を教材として扱うことで、高い演奏技術を必要とせず、歌やリコーダーが苦手な生徒も音色の探求に集中することができた。これは、紙を教材として扱う大きな利点であると言える。リコーダーは個人の技能の差が顕著であり、苦手な子は演奏に必死になってしまう。

創作の学習において、音探しをして音楽を構成する素材を集めておくこと、表現するテーマを決めること、子どもの思いや意図を適宜確認することの3つは、特に重要な手立てであると感じた。

アーティキュレーションを工夫する活動を取り入れることで、リコーダーを演奏する際にアーティキュレーションに気を付けて演奏する生徒が増えた。また、再表現活動で終わらず、思いや意図をもって音楽表現を工夫しようとする姿がみられた。

また、アーティキュレーションを工夫する活動は、指示がない楽譜を音楽として表現するのがいかに難しいかという大切さに気づくことにつながると感じた。

教師力向上実習を通して、授業をする難しさややりがいや改めて感じる事ができた。創作や、アーティキュレーションを工夫する活動は、生徒たちが思うように難しいことであったかもしれない。しかし、ある子がスタッカートをつけているところに別の子はスラーを付けてみたり、スラーを付ける位置が人によって違ったりといった音楽性の違いなどを感じる事ができる実践になったのではないかと考える。この音楽性について、中学生の段階で気づかせる大切さを感じた。

2 今後の課題

生徒の創作に対する難しいというイメージはあまり減らすことができなかつた。また、自分の表現したいものがなかなか決まらなかつたり、どのように表現したらいいのかわからなかつたりした生徒も見受けられたため、そうした生徒に対する有効な指導・援助についても考えていく必要がある。また、今回の紙を扱った創作は基本的に一人で一曲をつくる活動だったが、ペアやグループでセッションを行うことで、音色以外の要素も捉えられるのではないかと考えた。

アーティキュレーションを工夫する活動では、リコーダーの技能について教師が実態を把握しておく必要があると感じた。この活動を取り入れる前に、しっかりとタンギングや運指などの基礎基本ができていることが求められることがわかった。

音楽をつくる当事者意識を育てるためには、より計画的な題材構想が必要だと感じた。鑑賞と創作、器楽

と創作、歌唱と創作といったように、様々な組み合わせを試していきたい。

3 おわりに

音楽科の学習において、情景や心情をイメージして演奏することは少なくない。しかし、ただイメージするだけでなく、どのように演奏すると伝わるのかということを考え、試行錯誤し、主体的に表現しようとする事が大切だと考える。

今後は、再表現活動に偏らないよう気をつけながら、創作を中心とした題材構想を行い、音楽的な見方・考え方を働かせる授業づくりを続けていきたい。

授業を考えたり実践したりする中で、生徒の実態を適切に把握することや、必要な指導・援助を用意しておくこと、そして学習規律が必要であることを学んだ。また、生徒がわかりやすいように指示を出すということの難しさも感じた。今後はそうした教師力向上実習での課題を克服し、子どもが楽しみながら音楽的な見方・考え方を働かせられる授業づくりのできる教師を目指していきたい。

<引用・参考文献>

- ・小原光一ほか『中学生の音楽 1』、教育芸術社、pp.8-9
- ・小原光一ほか『中学生の音楽 2・3 上』、教育芸術社、pp.8-9
- ・小原光一ほか『中学生の音楽 2・3 下』、教育芸術社、pp.8-9
- ・菅 裕 (2021)『コロナ禍感染症対策下での音楽科授業についての調査—音楽科教員は何に困り、どのように対応したのか』、音楽教育ジャーナル Vol.19、p.33
- ・桐原礼 (2019)『身の回りの音や素材を取り入れた音楽活動について』、小学音楽通信 Spire_M、2019 年秋号、pp.8-11
- ・坪能克裕、坪能由紀子、高須一、熊木真見子、中島寿、高倉弘光、駒久美子、味府美香 (2012)『音楽づくりの授業アイデア集』、音楽之友社、pp.50-51
- ・中島寿・高倉弘光・平野次郎 (2016)『音楽の力×コミュニケーションでつくる音楽の授業』、東洋館出版社、p.8
- ・深見友紀子、小梨貴弘 (2019)『音楽科教育と ICT』音楽之友社
- ・文部科学省 (2018)『中学校学習指導要領解説 (平成 29 年告示) 音楽編』、教育芸術社、p.6、32
- ・文部科学省 (2018)『小学校学習指導要領解説 (平成 29 年告示) 音楽編』、東洋館出版社、pp.132-133
- ・三笠 裕也『コロナ禍におけるリコーダー指導の実際』、インターネット、<https://www.skymenu.net/case/418/>、(2023/1/22 にアクセス)